

教育部官僚の責任



教育荒廃文



知の崩壊の元凶、文部省
(有馬朗人文部大臣)

国家百年の計は教育にありといわれる。子供たちの能力をひき出し磨いていく教育こそは、かつての貧しかった時代の親たちが子供に与え得る最高の遺産だった。それはまた、人材を除けば目立つべき資源を持たない日本の、最も貴重な力の源泉でもあった。その教育が今、危機に瀕している。子供たちの体力が顕著に落ち、知力、気力もまた深刻な陰りを見せている。まさに百年の計の土台が揺らいでいる。

この危機に対処すべく、文部省は「生きる力」を蘇らせるとして今年六月、新方針を打ち出した。中央教育審議会

の答申に基づく新学習指導要領がそれである。果たして教育の場から「生きる力」は蘇るのか。私たちは日本の未来を切り拓いていく力を、今一度立て直すことができるのか。

現状の厳しさの一端は国立教育研究所の国際比較調査からも明らかだ。同研究所は一九六四年、八〇年、九五年度の三度にわたって、主として三十九か国の小中学生を対象に算数・数学と理科の学力の国際比較を行った。一連の調査が浮き彫りにする日本の子供

は関係ない、と答えた生徒の多さも突出していた。自己評価が低く、自分を愛せず、学ぶことを楽しまず、学びが生きることや夢に結びついていない。学ぶことは、未知の知に触れることだ。そこから人間の内在価値を開発していくことだ。学びは生きていることの根源的な力を生み出すはずだが、日本の子供たちは、よい成績をとってはいても、学びがどこにもつながらない。知識は役に立たない情報のように無為に蓄積されていくだけ。まるでブヨブヨの水膨れ人間のようなのだ。

が算数・数学、理科だけでなく、国語もスポーツも、全て頑張って、よい成績をとることが大切だと答えているのに対し、日本の子供たちは学校での勉強に意義を認めず「楽しむ時間をもちたい」とが大切だという考えなのだ。そう答えた日本の子供は三十九か国中、最多を占めた。

本以外に例がありません。要因は複数あると思えますが、大きな原因は学校でゆとり教育を強調してきたことではないでしょうか。

育しかないということ。完全な自由化教育で、今でもバラバラな子供たちが、もつとバラバラになります。

総合的学習は指導要領では「例えば国際理解、情報、環境、福祉、健康など横断的、総合的な学習」で「各学校が創意工夫を生かした特色ある教育」とされている。教える内容もその形式も全て現場に任せられる。学習の場は室内でも戸外でもよく、授業時間は二十分でも、逆に八十分でもよいというものだ。

繰り返される「失敗」

約十年ぶりの改訂の内容は、まず、二〇〇二年度から学校を完全に週五日制にする。それに合わせて教育内容を「厳選」し、必須科目を約三割減らす。「総合的学習の時間」を設けて独創性をのばす。新時代にマッチした新しい授業として情報教育に力を入れる、などが骨子だ。

供たちの知力が後退してきたことを示している。また平成元年の学習指導要領がゆとりや自由、独創性を強調した余り、学級崩壊など教育の融解現象が目に見えて増えたというのが教師たちの一致した見方だ。今回の新指導要領についても教師らは戸惑いを見せる。神奈川県立高校の中田肇教諭(仮名)が語った。

文部省の寺脇研・政策課長は、そうではないと説明した。「全員共通で学ぶことを三割減らし、自分が徹底して学びたいことを学んでいく。そうして能力を磨かせていくことが狙いです。その為に総合的学習の時間を設けたのです」

「私の学校には今、六十五人の教員がいますが、その中で文部省が望んでいるような情報教育を実践できるのは一人か二人しかいません。総合的学習の時間も学校が自主的に設定する科目も、やり方次第では大きなプラスです。寺脇課長らのアイデアは評価しますが、そのような理想論の前で学校全体が実は青息吐息

なんのことはない。文部省が力を入れてきたこれまでのゆとりと自由教育をさらに進める内容だ。

だが一連の調査は、まさにゆとり教育の中で知識が考える力に結びつかず、日本の子

「履修単位は従来の最低八十単位から七十四単位に減りま

「考え方としては素晴らしい。しかし、四十人の生徒がひとりひとり自由にやりたいと言った時、物理的にどう指導するのか。教える内容も教員の工夫次第と言われていますが、それだけの能力が全ての教員にあるのか。とてもそうは思えません」

なのです」

文部省の掲げる理想と現場には、大きな落差がある。現実問題として、教師たちはこれまで、決められた教科書とマニュアル本に助けられて授業をしてきた。勿論、中には熱心で創造的な教師もいるが、大半の教師は文部省の定める教科書とその内容をどのように教えるかを解説したマニュアルがなければ、教えることができなくなっている。

またこのような教師をつくらせてきたのが、指導要領をはじめとする文部省の現場に対する厳しいチェック体制である。教師を枠にはめてきた指導要領が、いま枠をはずそうとしているのが総合的学習に象徴される新しい指導要領だ。新たに与えられる自由の前で教師の多くが不安を抱く。寺脇副長が厳しい口調で述べた。

「こういう時は、全部人を入れ替えてやればよいのですが、勿論、無理です。先生方には、これまでの教育技術を考え直してもらわなければなりません。それが出来なければ辞めさせるとまでは言えませんが、問題視せざるを得ないということです」

潰されるはずだった文部省

教える能力のない教師が職を辞すのは、当然だ。だが、文部省はそんなことを言うだけでよいのか。文部省こそが、日本の子供たちの知の後退に大きな責任を負うべきではないのか。そもそも文部省がなぜ、幼稚園から大学院まで、国民の教育の端から端までを所管しなければならぬのか。寺脇課長自身、「こんなのは共産主義国家しかありません」と言うほどの、類例のない中央集中管理の教育システムが間違いなのだ。

東京工業大学の橋爪大三郎教授が語った。

「文部省主導でよい教育を行えると思うのが幻想です。文部省が教育問題をつくり出しているのですから、文部省が手を引くか、せめて間接的な関与にとどめることで教育はよくなるのです」

歴史をひもとけば文部行政の功罪がみえてくる。

明治時代、政府が義務教育の普及に力を入れたのは、当時は多くの寺子屋や裁縫学校があり、親たちが、子供に勉強よりも農業や家業の手伝いをさせた時代だったからだ。「義務教育は全ての子供を尋常小学校に送り込み、近代化の基盤をつくることに貢献しました。しかし、その結果、親の教育権が認められなくな

りました。また、学校は国がつくるのが当たり前で私立は例外になりました。国家による子供たちの教育は、日米開戦の一九四一年に尋常小学校が国民学校になってから、更に徹底されました。ドイツのフォルクスシュールの真似で、学校は軍隊と同じく子供に国への奉仕を教え、子供を親からとりあげて勤労動員させたりする場となったのです」

橋爪教授は、戦前戦中の状況をこう語った。

そして一九四五年、日本は敗戦で米軍の占領下に入った。米国から派遣された二十七名の教育使節団は、ひと月の滞日期間で報告をまとめ、日本の教育の徹底的な「民主化」を打ち出した。文部省に象徴される中央集権的な教育

行政を解体し、教育の地方分権を推進すべきという内容だ。その改革をGHQは文部省を潰すよりも存続させることで推進しようとした。つまり潰されるはずだった文部省は、GHQの身替りとして前面に立てられたのだ。

が、GHQの方針が単なる押しつけだったわけではない。文部省の権限を弱め、地方自治体や教師に意思決定の権限を大幅に与えるという考え方は、すでに明治十二年（一八七九年）の教育令に見られるのだと、天野郁夫・国立学校財務センター教授が『日本の教育システム——構造と変化』の中で述べている。

近代国家建設の熱情に燃えた明治政府が、義務教育と共に実現を望んだ教育の地方分権は、明治初期には潰されたが、同じ考えが六十年余りを経て、占領軍の考えとして戻ってきたわけだ。だが、教育の地方分権はまたもや失敗する。教育改革を進めるために辛うじて存続を許されたはずの文部省が、日本が占領を解かれた一九五二年以来、息を吹き返し再び中央集権を強めたからだ。

さらにその後、文部省はも

っと力をつけていく。戦後の教育の歴史は、周知のように文部省と日教組の対立の歴史だった。東京電機大学の大江正比古教授が語った。

「日教組は革新勢力の代表として財界や自民党、日米安保に反対し、文部省は日教組がそのイデオロギーを教育現場に持ち込むのに対抗するた

め、殊更に教育権は国にあると強調しました。教育権は教師にも親にもなく、国にあるという従来の考え方です。教育現場では双方が子供と親の取り合いを演じ、教育はそっちのけになりました。親たちは教育に関しては日教組も文部省も当てにはならないと判断し、子供の学力養成は塾や予備校に頼るようになった。それが今日の状況につながっているのです」

生徒の教育よりも日教組との対立に精力を注ぐかのように、文部省は指導要領によって教育現場に細かく口出しするようになった。何をいつ教えるのかという教育のプロセスを、現場に立つこともない文部官僚が管理するのだ。結果は火を見るより明らかだ。橋爪教授が語る。

「こういふ時は、全部人を入れ替えてやればよいのですが、勿論、無理です。先生方には、これまでの教育技術を考え直してもらわなければなりません。それが出来なければ辞めさせるとまでは言えませんが、問題視せざるを得ないということです」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

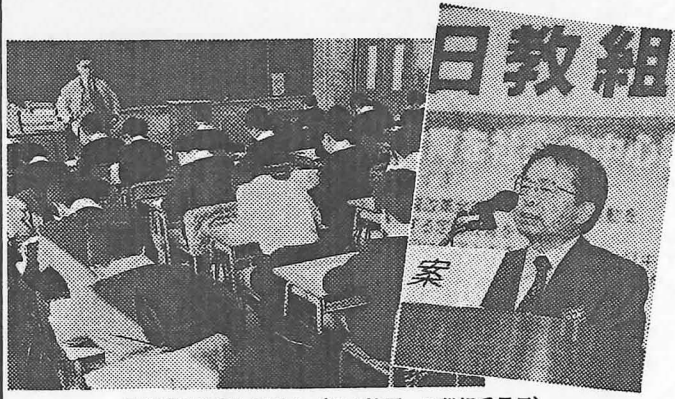
「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」

「教師たちは、国語なら国語、社会なら社会という縦割り受験に必要な知識をただ教えてきました。しかもはじめに教材ありきで、バラバラの教科の知識をただ詰め込ませる。それが一人一人の生き方や夢にどうつながるかなど、考えもしないのです。生きる力、夢を描く力に結びつく総合的な人間の魅力を私は、人間力」と呼びますが、それが最も欠けているのが教師です」



日教組が教師を貶めた (川上祐司・日教組委員長)

京都大学の中西輝政教授が語る。

「戦前の師範学校では、教育者は特別に人間の心の在り方、社会や国家への責任感、伝統文化への親近感を身につけてきました。教師は聖職者という考えはそこから生れたのです。ところが戦後の教員養成では社会や国家、伝統に対する責任感よりも、幅広い教養をもつていことが重視されるようになりました。本来は教師という職業にはそれが天職だという意識をもった人が就くべきですが、それがなくなっていたのが戦後教育の大きな過ちです」

それに追い討ちをかけたのが日教組の「労働者説」だというのが、日教組自ら教師の立場を貶めたわけだ。高橋教授も語る。

「文部省の新たな柱のひとつ、学校完全五日制というのは、実は子供たちの教育という観点から出てきた考えではありません。教師も労働者であり、一般労働者と同様週二日休む必要があるという発想から来たものです。それに後からつけた理由が、新しい学力」なのだ

「教師は労働者である」と主張

性欲減退症 不感症 陰萎 官能性神経症 強精 不眠症

医薬品

60錠 4,500円 180錠 10,000円 320錠 16,000円

8G・4本入 4,000円

◆飲みやすいドリンクタイプ

プリズマ 赤ルモン錠 **プリズマ 赤ルモン精**

☆この医薬品は「使用上の注意」をよく読んで正しくお使い下さい。
 ◆全国有名薬局・薬店にあり◆類似品に注意「プリズマ」とご指定下さい。
 ◆薬局品切時は薬価と消費税を同封の上直接申込下さい。

原沢製薬工業株式会社 (週新係)
 〒108-0074 東京都港区高輪3-19-17 ☎03(3441)5191 (大代)

する一方で、日教組は長年、教育課程自主編成の運動を続けてきた。文部省が今回掲げた自由裁量の教育を主張してきた。まさに日教組にとっては今、好機到来のはずだ。だが、彼らは実は大いに戸惑っている。総合的学習の自由裁量の部分をどのように教えてよいかかわからず、いかに自由裁量するかのマニュアル本

哲学なき文部行政

フィルム・ボジとネガのように文部省と日教組はどちらもどちらだ。そして奇妙なことに、かつて対立していた彼らが今、手を結び合っている。日教組は九五年度の定期大会で文部省を「バートナー」と位置づけた。

協調路線の中で、日教組が反対し続けてきた主任制度や学習指導要領の受け入れを決定した先述の十項目の倫理綱領も事実上の見直しをした。文部省側も応えて日教組の打ち出すような「もっと多くのゆとり」や「もっと多くの自由」を追求する新方針を出してきた。なぜ、両者は今、歩み寄るのか。

が求められているという、笑えない実態があるのだ。高橋教授がこう批評した。「人間力を欠くのが他でもない教師です。自分にもないものを教えないといっても教えることはできない。だから戸惑っているのです」戦後教育の中で生徒も教師も、生きる力、学ぶ力を失ったのだ。

日教組側には組織率が三〇％を割り込むという深刻な支持の減少がある。文部省側の歩み寄りの理由について、中西教授は世代問題をひとつの要素としてあげた。「今や各省庁とも団塊の世代が上級幹部になっています。彼らが受けた教育はまさに日教組教育です。表面的には文部省が勝ったように見えますが、実は日教組が勝ったとも言えるのです。これはもうブラックユーモアです」

この間に、子供たちの学力は更に惨たる有様に陥った。先述の森校長は子供たちの学力は「七五三」だと述べた。「小学校で三割、中学校で五

割、高校で七割が、授業が理解できていないという現場の実感を表わしています。でも私の実感では、事態は更に悪い。高校で二割が授業について来てくれればいいところだと思っっています」中西教授も語る。「ここ十年の大学入学者の学力低下は目を覆うばかりです。これほどの学力低下は明治以来、一度もおきなかった。私の国際政治のゼミに来る学生がフランス革命やベルサイユ講和会議を知らなかったりする。こんな驚くべき事態が今や話題にもならないくらい当たり前になりました」

日本の文部行政で実質的に欠けているのが、この種の基本論である。私たちはなぜ学ぶのか、私たちは何者かという根本を問うべきだ。子供たちに「生きる力」を養わせようとするなら、まず、自己のアイデンティティを明確に意識させることだ。それは自分の生まれた国を問い、自分の育った文化について考えることでもある。文部省と日教組の演じたイデオロギーの対立を越えたところに、子供たちに伝えるべき大切な文化があるのを忘れてはならない。

類例のない中央集権体質の教育行政の中で、生徒も教師も自ら求めて学び教える気概が失われたところに、再び、細から規程に基づく「自由な教育」を押しつけるのは木に竹を接ぐようなものだ。日本の教育に欠けているのは、文部省が打ち出した教育技術論ではなく、哲学なのだ。たとえば、英国のサッチャー

元首相は教育を語るとき、まず、人間とはなにか、人間の幸せとはなにかという青臭い議論を散々重ねた。その末に、人間の自立を説き、自立に支えられた幸せを実現するための教育を説いた。ドイツには、科学研究者に最も必要なのは哲学だという考え方がある。科学という理詰めではなく、科学の末に見えてくる真理は、哲学の素養なしには、その意味を十分に汲みとることはできないという考えである。

だが文部行政は子供をさっのけて中央集権にこだわってきた。その結果、教育現場には、青白くて覇気がなく知識水ぶくれで、しかも、そんな自分を愛することができない子供たちが出現した。戦後半世紀の文部行政は失敗だったことの証左である。ならば文部省は、もはや教育の場から退くべきだ。少なくとも、幼稚園から大学院まで、そして省庁再編後は科学技術庁と合併して科学の振興にまで力を振るおうと考えるべきではない。文部省は自らの役割を限定せよ。義務教育は地方自治体に任せ、高等教育を中央集権で支配するのはやめることだ。教育の場から生きる力を蘇らせるには、文部省の官僚主義の排除が肝要だ。

「選択・責任・連帯の教育改革」岩波ブックレット No. 471 堤清二・橋爪大三郎

社会経済生産性本部の「教育改革に関する中間報告書」の内容のほとんど、堤清二・橋爪大三郎両氏の対談を集録したもの。報告書起草の精神的背景を知るために最適のブックレットとして、「選択・責任・連帯の教育改革」の原文を手に入れたい方におすすし

対談の中で橋爪氏は、「現在の学校は監獄にそつ

「くりです」と指摘、校長も教員も生徒も、いつも自分からは見えない誰かに見られているのではとおびえている。それは入学試験だったり、文部省の通達や指導要領だったり。改革案は「自分がもう一度学校に行くのであれば、こんな学校だつたら行きたい」と思えるものをつくつたと語る。両氏の提言する改革の基本姿勢と目的は「学校の機能回復、教育機能の回復」であるが、それが実現したらどんなにすばらしいだろうと思わずにはいられない一冊である。

おまけ 『77アム・ポリテック』 通巻23号 p.19 現象を捉える女性社会 1999.3.25 発行

橋爪 大三郎

1. 1948年10月21日
2. 東京工業大学大学院社会学研究科価値システム専攻教授
3. 社会学
- 4.



昨年から、社会経済生産性本部・社会政策特別委員会で、専門委員として活動し、7月に中間報告「選択・責任・連帯の教育改革」を公表しました。大学に関しては、学生定員の廃止、入試の廃止とキキックアウト制の導入、奨学金の大幅拡充などを提言しています。NHKの視点論点、毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞の文化欄でも、この趣旨を紹介しました。中間報告の全文は、私のホームページ <http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm> で読むことができます。

おまけ 『77アム・ポリテック』 通巻23号 p.19 現象を捉える女性社会 1999.3.25 発行

都内百貨店名店街(とうぜん) 浅草今半 東京都台東区西浅草二丁目一七四 電話03-3842-2842(六六六代表)

牛山やちんか魚 牛山すずき 牛山もろはら

外資が始めた「新保険」

こんなもの？ 主婦労働月15万円



炊事、育児、買い物と主婦の仕事は大変だ

近ごろは「フロ、メシ、ネル」の亭主は論外だ。奥様は魔女ではないのだから、自動的に風呂は沸かないし、料理の膳もそろわぬ。みんな山の神様の働きのお陰なのである。実は最近、そのカミ様の働きの金額に評価する動きが出てきた。亭主たちが女房に給料を払わねばならぬ日が来るのか。

妻に、「アタタの分も家事やってるんだから、その分、給料でもらおうかしら」と言われたらどうします。

実は、外資系の損害保険会社「アメリカンホーム保険」(東京・錦糸町)は11月16日から通信販売の所得補償保険

に専業主婦も加入できるという特約を加えた。これは業界で初の試みだという。で、その所得補償の最高月額というのが15万円だということ。家事は立派な労働である。その意味では対価を要求してもいいのかもしれないが、15万円とは……

家政婦さんなら、働きが悪いので契約解消ということがあっても、専業主婦の場合、働きが悪いからといって夫婦

解消とはいかない。相場がない専業主婦の仕事にどうやって値段をつけたか? 同社の住政敏バイスプレジデントに仕組みを聞こう。

代行からコストを算出する……

「所得補償保険というのは、被保険者が病気とかケガで仕事ができなくなったことによって被る損害の分を支払

うものです。給与所得者なら給与の減少分を補償するというのが従来の趣旨でした。ところが、一般家庭の主婦から「自分たちはどうして入れないの」と、問い合わせが多かったんです。確かに、病気やケガで仕事ができなくなり、家計は損害を被るわけですから、原点に返って考えれば専業主婦が加入しても構わないわけなんです」

実際、妻に入院されてみると、炊事、洗濯、掃除、育児など家事の負担がいかに大きいか、世の夫どもは実感するハメになる。これが評価の物差しになるのだ。つまり、専業主婦のダウンで余儀なくされた支出を計るという仕組みだ。その際、同社が参考にしたのは経企庁経済研究所がまとめた「あなたの家事の値段はおいくらですか」という冊子だ。炊事、洗濯、育児などを専門職、たとえば調理士見習、洗濯工、保母らに代行してもらったらどうなるか、そのコスト調査が載っている。91年度のデータを見ると、有配偶女性の果たす年間の家事

の金額評価は約187万円だ。これを12で割って、1か月当たり約15万6000円。切りのいいところで15万円が目安になるわけだ。

なさいと言われたら、大概の男たちは「高すぎる」と悲鳴を上げるに違いない。でも、財産の権利は五分五分と考えれば、月額30万円以上稼ぐ夫は、15万円でも安いと思うかもしれない。金額で評価するというのは結構微妙な問題なのである。

授の話。「95年に北京の世界女性会議で採択された行動綱領では、アンペイドワーク(無償

値段がないものに値段をつけられ……



専業主婦の労働を妥当に評価する方法はあるのだろうか。東京工業大学で教える社会学の橋爪大三郎教授に聞いた。

資本主義社会では、初めは工場労働をしていた女性や子供が家に入り、代わりに男が働きに出るようになった歴史がある。そこでヨーロッパ、アメリカ、日本で初めて専業主婦が生まれてくる。

さて、妻が交通事故で死んだとする。損害賠償の問題が起きる。一つの計算法は妻の代わりをしてくれる家政婦を雇うための、その費用を代替

する方法。もう一つは、例えば妻が弁護士だったとしたら、その収入に見合った賠償を求めるといやり方。ただし、いずれの計算も「たられば」の話だから、本当は根拠薄弱です。といつても、そもそも値段がつかないものを計算するからには無理に決まっている。でも、これ以上の方法はないし、いざというときはこうするしかない。事実、保険というのはいざというときの存在だから、これでいいんです。

金額についても半分くらいの人は安いと思えば、半分くらいの人が高いと思う。これでちょうどいいわけです。

一つの世界帯を考えたとき、

労働)の評価ということが入っています。それは主として女性が担っているもので、これを計算しようという提案ができていて、機運が高まっているのは事実です。ただし、専業主婦の在り方もいろいろです。介護や子育てをしている主婦と、比較的にんびりしている主婦とは全然違うし、同じ専業主婦でも夫が家事に積極的かそうでないかということもある。結局、実際に何時間労働しているかを見るよりしようがないわけで、高いかどうかなど一概にはいえません」

目白学園女子短大生活科学科非常勤講師・品田知美氏はこのアンペイドワークを専門に研究している。品田氏の話。「日本の家事労働を評価すると、欧米に比べて非常に低くなってしまうという問題が指摘されています。まず家事の時間が相対的に短い。これは要するに平均値だからです。しかし、日本では欧米に比べて家事が主婦に集中する傾向があります。

世論はままなまま

民意のデジタル化

世論調査は当てにならない、という説がある。やり方が時代に合わないのか、政治が悪いのか。あるいは、「世論」自体に問題があるのか。

自民党が歴史的な大敗を喫し、橋本龍太郎首相を退陣に追い込んだ昨年七月の参議院選挙。投票率が予想外に上がり、無党派層の選択が政治を動かした。それはまた、新聞・テレビなどマスコミにとっても「敗北」だった、との自己批判が一部にある。

電話調査から選ばれる人

選挙情勢調査は世論調査の方法をベースにしながら、様々な推計を加えるものだ。独自のノウハウを持つ各社が感信をかけて行いながら、一体、なぜこれほどずれただろうか。

すい比例区では事前予測通りの結果になったものの、当落線上で各候補が競り合う選挙区で食い違った。

もたびたび使われる方法だが、プライベート意識の高まりから、都市圏では電話番号を電話帳に掲載する人が減り、特に都内では五割を切っている。電話番号を載せる人の方が自民党支持率が高い、という指摘もある。



ている、電話帳に掲載しているかどうかに関係なく任意の電話番号に電話をかけるRDD(ランダム・デジタル・ダイヤリング)を試験的に始めているものの、「声なき声をつかむことの難しさは、間違いなく強まっている」というのだ。「正確な調査のための努力はしているが、幅広い世論をすくい切れないのは事実」と苦しい心情を吐露する世論調査担当者もいる。

政治状況が複雑だから

文部省統計数理研究所の林知己夫名誉教授は、調査実施日の云々より、調査のあり方、特に正確性の追求を怠るマスコミが増えてきた風潮に加えて、旧態依然とした質問の出し方に疑問を呈する。「政治が保守か革新か、明快でやさしかった五五年体制が終わわり、国民の目にわかりにくくなっている。景気とか、福祉とか、問題」とに支持政党も違ってくる

「政治なら政治だけ見ているからだめなんです。社会の全体像、日本人像を見て、大衆の心のあり方まで踏み込む調査をしないと」とくきをさす。

ていたと語る。昨年五月の「生活定点」調査で、現在の社会に対する不安が急増していたからだ。世の中に対する怒り、不安、哀しみの感情などが増え、また「日本は悪い方向に向かっている」は九六年の三七%から六六%へ、「日本人は悪い方向に向かっている」も四二%から六六%、世の行く末は悪くなる「も三三%から五一%へと急増ぶりを示していた。

予測外れるのは必然?

東京工業大の橋爪大三郎教授(社会学)は、現在の政治状況を「正常でない」と厳しい。政治的意識が高い人、反対に無関心な人、支持政党が解党、消滅してしまつた人……。そうした層が無党派になるのは、適当な既成政党がみつからない、やむをえない一時のぎだという。

それにしても、いまや多数派を占めるまでになつた日本の「無党派」とはいかなるものなのか。

「単にマスコミの逆を行きたいというだけなら、情けない」フロイトも言うように、自分の認識する欲望と無意識の欲望は往々にして対立する。精神分析学の岸田秀・和光大教授は、だから予測が外れるのは必然的だという。「過去の延長線上に現在がない時代、当たらないのは当然」



市場規模六千六百億円に成長したカラオケボックスが、激安型と高級アミューズメント型に「極化」始めている。歌だけが目的の若い利用客が激安店に集う一方で、「料理も雰囲気も」と要求するアダルトな客が目立ってきた。テーマパーク風など趣向を凝らした施設が次々と誕生。飽和状態に達した市場で、五千六百万人のカラオケファンの奪い合いは厳しさを増す。

カラオケボックス 二極化

●テーマパーク風

「よっこそハローキティ。仲良く楽しんでいってね」
東京・銀座。業界最大手の第一興商(本社東京)が手掛けるカラオケボックスのエレベーターを降りると、ハローキティが話しかけてきた。

全フロア六十三室のうち十一室が人気キャラクターで飾られ、廊下からトイレまでテーマパーク風。空前のキティブームも追い風に、なつて一九九七年十月のオープン以来、予約は殺到。これまでに神戸市や高知市など全国六店にキティルームが誕生した。

東京・六本木のホテルアイビスで、ガイア(本社東京)が企画したカラオケルームは、リゾートホテルがテーマの十六室。水着で歌えるジャグジー仕様のほかモロッコ風、カナダ風、アラブ風などの個性的な造りが特色だ。

「仲のよい友達と個室でくつろぎ、グルメとパーテ

激安型と高級型に



イーを楽しみたい。そんな客の求めに応じたらリソートホテルの形になった」と同社の木戸幸彦プロデューサー。

東京・麻布台の「フェスタ飯倉」のように、専任の料理人とソムリエが常駐し、グルメサービスを徹底している施設も出現、「二次会が省ける」とアダルト層に評判だ。

●売上げは順調

全国カラオケ事業者協会(本部東京)などの調査によると、カラオケルームの部屋数は九〇年代を通じて増え続け、九六年には十六

趣向凝らし

ファン争奪

万と過去最高を記録。一店舗当たりの月間売上げも順調で、九六年の約五百三十五万円から九八年は約五百七十七万円に。

注目されるのは、月間売上げ一千万円を越す店が九六年には一・八%にすぎなかったのに対し、九八年は八・三%と大幅に増えた点だ。人気店や大型店への集中が進み、淘汰とつた。

カラオケを完備したファミリー店の2階建てバスで、お別れ会を開く母子のグループ。千葉県船橋市

●プラスアルファ

実際、同協会の九八年三月のアンケートでは、客の利用促進策に「飲食メニューの充実」「宴会・パーティーの充実」などを挙げ、「店の改装」を課題と考える高級化志向の業者が全体の四割を超えた。

「カラオケ環境が整うに
で明るい雰囲気
気の中、ホームパーティー
感覚で楽しんでもらえる」という同社は、潜在需要の大きいファ

「歌えればどこでもいい」から『気持ちよく歌いたい』『グルメも楽しみたい』と、歌以外のプラスアルファを利用者は求めるようになったからだ」と同協会の片岡史朗専務理事は強調する。
そんな中、日本マクドナルド(本社東京)は、店のパーティースペースにカラオケ機器を設置、子どもの誕生日などを歌付きで開けるようにした。既に千葉、愛知、京都、大阪など全国十五店で展開、うち四店は二階建てバスを改良したものだ。
「子どもから年寄りまで思う」と話している。



A controversial sink-or-swim tack toward Japan's troubled youths

By Nicole Gauvette
Staff writer of The Christian Science Monitor

2/18/99

KOWA CITY, JAPAN

Every morning at 9 a.m., Hiroshi Totsuka sends his students into the silvery blue Pacific to fight for their lives. This experience, he says, is just what they need.

Mr. Totsuka is not a social worker or psychologist, he's a professional sailor. His supporters say the Totsuka Yacht School has saved hundreds of children from delinquency, depression, and even disease.

Totsuka says his approach — beatings, forced encounters with danger, and military-like discipline — works because it makes Japan's wayward youths aware of their proper place in society.

When five of his students died in the 1980s, prosecutors disagreed.

Courts convicted him on a range of charges in two of the deaths, the result of harsh beatings and confinement. Totsuka spent three years behind bars and is appealing a second jail sentence.

"I feel some hatred for Mr. Totsuka, for what he did to my son's life," says Toru Mizutani, whose son Shin was lost at sea. "My son will

never come back."

The deaths made Totsuka a pariah, but he has been rebuilding his school over the past decade. Today the number of applications is growing and he is turning people away.

He has the backing of company presidents and the ear of people nationwide who attend his seminars. In interviews, parents, sociologists, educators, and a psychologist were all reluctant to criticize him. Last month Beat Takeshi, a popular director and TV personality, suggested in a major magazine that Totsuka schools be opened across the country.

It is a puzzling comeback.

How a man convicted in the deaths of two young boys, a man without educational, religious, or counseling credentials, can become a sought-after adviser says as much about the uneasy state of Japan today as it does about the man himself.

As the 1990s wind down, an entrenched recession is eroding social and economic stability. Critics and working people alike complain that the country has lost its sense of purpose. Japan's children have become a disturbing symbol of this malaise. Increasingly violent and adrift, they are, one teacher says, "wild at heart."

To families looking for answers, Totsuka hawks a philosophy of strong patriarchy and traditional values that evokes the imagined purity of Japan's past — a vision of unity and discipline that has potent appeal for many Japanese.

He reinforces his words with action, using training methods that echo old military and religious practices. In counterpoint, he decries the Western concept of human rights, which he says has left parents reluctant to physically discipline their children.

Backlash against Western standards

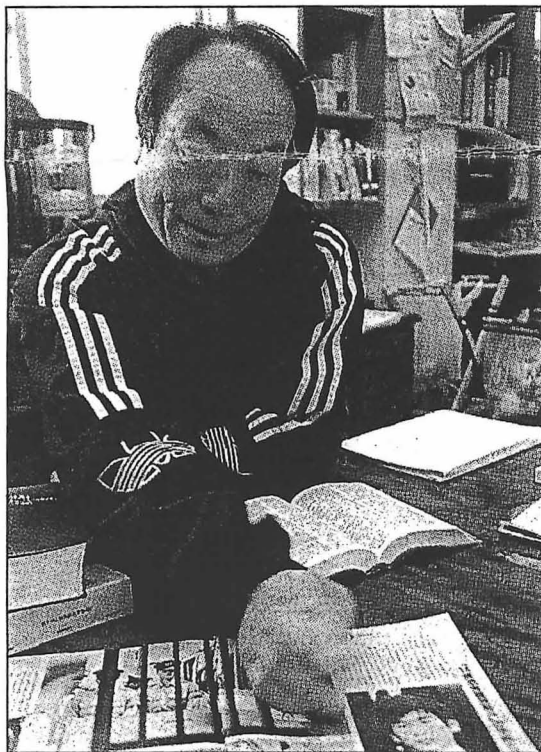
In some ways, his argument is a cultural version of the economic debate in parts of Asia now — whether Western standards are appropriate, and whether they should be cast out in part or in full. Totsuka discusses these issues in three to four seminars a month, with groups of 10 to 20, and in a newsletter to 3,000 subscribers.

"It's always stimulating to hear him talk," says Hideaki Yano, a Tokyo book editor who regularly attends the seminars, which cost up to \$90. "He encourages us to develop inner strength."

Corporate boosters provide funding. One security firm has given \$90,000 since 1986. His most vocal supporter is the popular nationalist intellectual Shintaro Ishihara, who compares Totsuka to Copernicus, the scientist persecuted for saying the earth revolved around the sun.

Totsuka's comeback indicates one inward, authoritarian turn Japan could take in the future. "It's just a question of whether Totsuka can ride the trend of where Japan is going right now," says Tsunekazu Takeuchi, an education professor at Tokyo's Kokugakuin University. "Japan could turn back to the past."

Totsuka opened his school in 1977 after victory in a transpacific sailing race made him a national hero. One of the first students was a high school dropout who quickly decided he'd rather return to his studies. His delighted parents spread the word: Totsuka had a way with difficult kids.



School founder Hiroshi Totsuka's methods are meant to promote development of self-discipline, restraint, perseverance, and a proper sense of your place, all classic Japanese values.

Totsuka closed the school after his 1982 convictions, then reopened in 1986. Until his appeal of the second conviction is over, he can do as he pleases as long as he breaks no laws.

Today the school is a worn, mildewed building just off the beach in Kowa, a small town on Japan's south-central coast.

It's crammed with books and gear and smells faintly of kerosene from the heaters. Totsuka is in the den fiddling with a video. He is a tiny bull of a man, whose thick arms and barrel chest make him seem larger. He smiles constantly and exudes a hearty charisma.

Applications have risen in the last two years, says Tateyuki Yokota, Totsuka's aide. Last year the school got more than 10 inquiries a month.

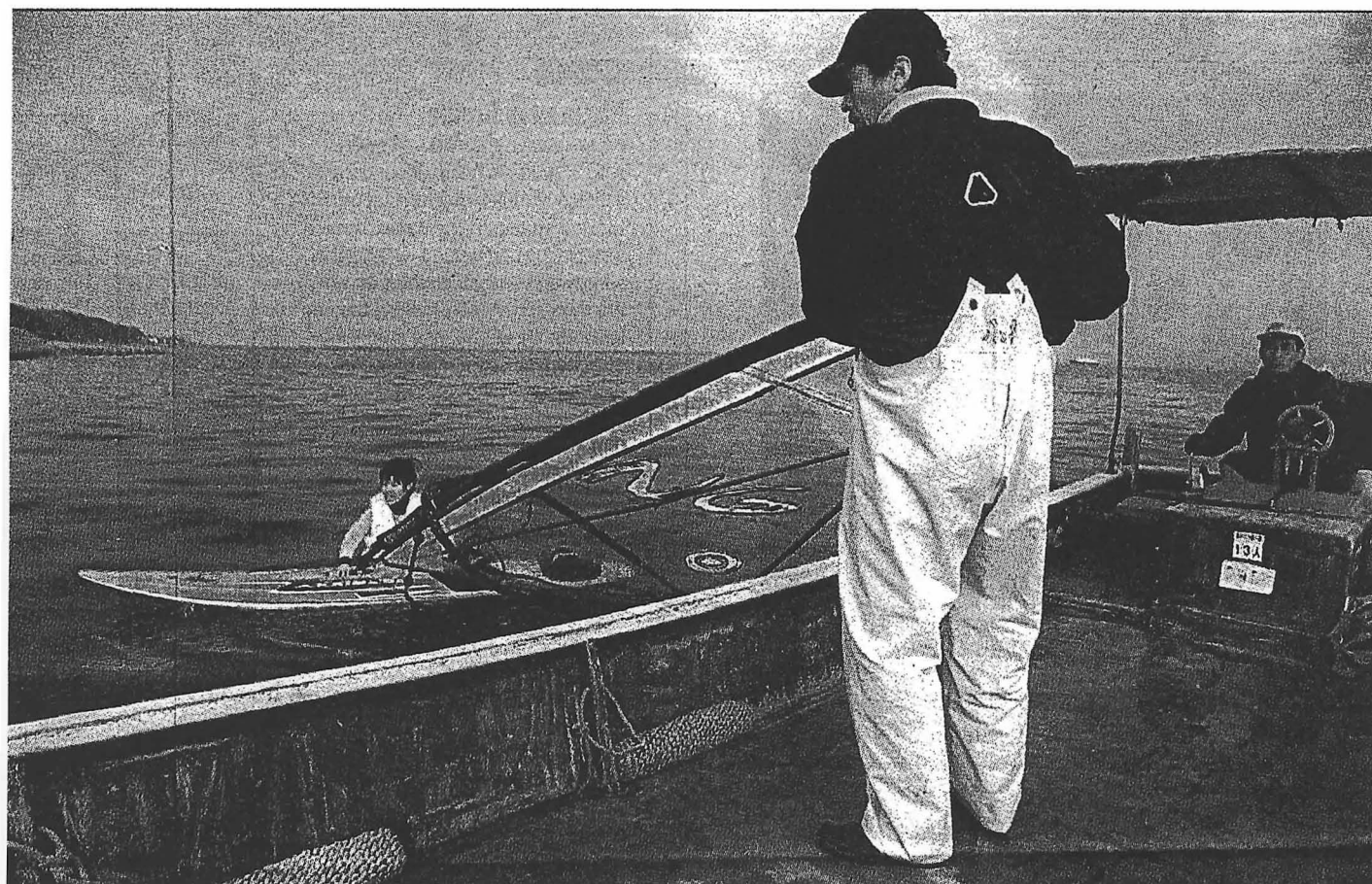
In the 1980s, Totsuka had about 100 students, but he's restricting enrollment to 10 places until his appeal is over. Today, five students are here, four boys and a girl. The other five have run away.

One boy arrived yesterday from northern Japan, brought by his father because he'd dropped out and started stealing. Like all new students, he was videotaped on arrival so that Totsuka can do "before" and "after" comparisons.

"I watched 'The Ten Commandments' with Charlton Heston the other day," Totsuka says, as he presses "play." "At one point, Moses says you need rules to enjoy freedom. I believe that."

A skinny kid appears on the screen. His long hair is fashionably auburn, his dye job a trendy symbol of individuality. "That hairstyle was the only way he could be different," Totsuka mutters.





PHOTOS BY NICOLE GAQUETTE

BUILDING MENTAL AND PHYSICAL STRENGTH: Students bow to coaches (l.). Kayoko, (below), is at Totsuka's school because she's heavily in debt and her parents want her to learn responsibility.

Next we see the boy in close-up. His hair has been shorn to black stubble and his face is blank. "He's not stupid," Totsuka says. "But we have to develop his will. Through physical training, we build their muscles and their will."

The word "will," or *tshti*, has great significance for Totsuka. By "will" he means self-discipline, restraint, perseverance, and a proper sense of your place, all classic Japanese values.

Only by developing will, or adhering to these Japanese rules, can people enjoy freedom, Totsuka says. Japan's ability to mobilize its collective will is the one thing that sets it apart from other nations. "As individuals we may never be better than Westerners. But when we work together, the outcome is different."

Saving the country by strengthening will

But will is in short supply as Japan abandons older ways, he says. "This [loss] will destroy Japan."

That belief fuels his mission to develop will, and thereby save the country. Central to this goal is his "theory of the brain stem."

Totsuka contends that will, or mental strength, is located in a specific part of the brain and can be built up just like a muscle, but only through "the release of hormones driven by fear or extreme situations." So fear and extreme situations are what he provides.

Totsuka's new student is barely into his teens, so he can't be named in this story. But he'd like us to call him Clint Eastwood. He knows why he's

here. "It's very important for my dad that I turn out OK," he says.

His father, Minoru Watanabe, paid a \$25,000 fee and will pay \$870 a month during his son's stay. He's aware of Totsuka's history. "It's a risk, but it's the only choice I had," Mr. Watanabe says. "[My son] was stealing. I just didn't know what to do."

Mr. Mizutani recognizes that sense of desperation. His son had dropped out of school and withdrawn into silence when Mizutani enrolled him at Totsuka's. A few weeks after their arrival, Shin and another boy jumped off a boat and disappeared. The court later determined that they were trying to escape punishment by the coaches.

"If Mr. Totsuka is still doing the same thing, or believes in the same theories, I would tell parents who are interested in him today, 'Don't put your child in his school; his methods are crazy,'" Mizutani says. "Violence never works."

But parents such as Watanabe feel they have few options. "There is hardly any place for troubled kids like my son," he says. At the same time, delinquency is increasing. Juvenile crime has climbed steadily since 1996, and youth violence is now a national fixation.

Many observers attribute this trend to failures in the family and education system. "The family has become spiritually empty," says sociologist Daisaburo Hashizume of the Tokyo Institute of Technology. "Teachers are too busy to help kids."

Critics cite a postwar economic system that pushes men to work ceaselessly, leaving women to raise children alone. Clint Eastwood's father is one of many who lives away from home because of work.

Professor Hashizume says these practices leave children without strong role models to teach society's basic rules. "Fathers are lacking, and mothers don't know how. The socialization process has been seriously damaged."

The sense of national dislocation is most clearly seen in the "crisis literature" boom. Best-selling titles like "Japan's Failure" dwell on per-

ceived flaws like a Japanese inability to think logically. "The feeling that we've lost our direction prevails right now," admits Hashizume. In this climate, Totsuka's emphasis on older values and his stance as a father figure in a fatherless society have great appeal. "His methods are dangerous," Hashizume says, "but if there is no better way than his, nobody is qualified to blame him."

Do-it-yourself windsurfing lessons

Clint Eastwood wants to go home. He couldn't do all the sit-ups this morning, so one of the coaches hit him in the stomach. "I want to see my mom," he mumbles.

It will be a while before any homecoming. Totsuka has eased the intensity of his training because "the authorities are watching," so students now stay for up to a year, instead of three months. Morning roll call is at 7 a.m., followed by an hour of exercises routinely enforced by corporal punishment. (Japan's education ministry forbids corporal punishment, but Totsuka's school is legally a business.) The rest of the day is devoted to windsurfing, chores, and meals. Lights go out at 10 p.m.

There is no counseling and little instruction. On Clint's second day, one of the two coaches takes him out into open water. He stops the flat-bottomed boat, tells the boy to jump overboard, and slips a windsurfer into the water. The boat surges away, leaving the boy in its choppy wake scrambling to mount the board. He has not windsurfed before and has no life jacket. In aiming to release "hormones driven by fear," Totsuka is also recreating a central moment in his own life.

He and a friend were sailing one evening in 1972 when a typhoon capsized their boat. While they fought to stay afloat through the night, Totsuka had his epiphany about the crucial im-

JUNIOR STUDENT: The parents of Kaide Yokota (l.) work for the school. They believe exposure to its methods will improve little Kaide's health.

portance of will. "The humanists tell us we must try to save our fellow man," he writes in one of his books, "but all I thought was that I wanted to survive. [My friend] would have to go on living on his own strength or nothing at all."

Echo of ancient Zen practices

Totsuka has gone to great lengths to develop his students' will to persevere. Before his convictions, new arrivals slept in small cages. Students were beaten harder and more regularly. Training on the water was more difficult as well. Custom-made boats were designed to capsize easily.

His methods are meant to echo ancient Zen practices in which priests, samurai warriors, and even athletes used physical endurance and steely self-discipline to purify the spirit.

Priests would meditate under an icy waterfall; fencers would stand for hours on a tall platform just the size of their feet. The point was to strip all unnecessary consciousness between thought and action, be it in praying or parrying.

"Whether it's getting hit, running up mountains barefoot, or sitting under cold waterfalls for hours, these exercises strengthen the part of the brain [where will resides]," says Yokota, Totsuka's aide.

Some students don't respond well. In 1979, a badly bruised 13-year-old died of a stomach injury. In 1980, a 21-year-old died after repeated beatings, as did a 13-year-old in 1982, the same year Shin and another student were lost at sea.

There is little remorse here for these boys today. Yokota smiles ruefully as he explains that Totsuka is the victim of media and judicial bias. He says the first two boys died of illness, and the third died because of hospital malpractice - he was fine when they brought him in.

On the contrary, claims Yokota, his boss's methods have resulted in other boys being healed from illnesses ranging from autism to schizophrenia. Totsuka won't answer questions about the boys who died, but he does address the subject in one of his books. He asks whether his entire philosophy is wrong just because a few weren't strong enough to save themselves. When you press the point, his smile slips. When it does, what you see on his weathered face isn't cruelty but despair. Then the smile is back in place, and he offers his hand in farewell. "In the long run," he says, "you'll see I'm right."



LONELY ROAD: Windsurfing is a method of developing students' perseverance. They virtually teach themselves.

大学改革が進むなかで じわり「文学部不要論」

新設大にはゼロ 女子大・短大では衣替え

実学に対する虚学、を誇りにしてきた。無用の用としてきたはずの文学部が、大学改革の流れで出てきた「不要論」の逆風にさらされ、揺れている。学部も学科の看板を掛け替える大学、短大も少なからず出てきた。だれも言わないに広がるこの論の、意味するところは何か。(山脇 文子)

法政大学の一九九九年年度とコンピューターを必修としたのも話題だ。「その二つを学ばせること自体が、新しさではありません。目的意識もなく漫然と学んでいては何も身につかない。自分が何をしたいのか発見させる手段としての留学と「コンピュータなんです」

学部が、志願者増の原因だ。どちらも、倍率は三十倍を超えた。「大学としては思い切ったかかげしたが、予想以上に受験生が集まり、ひとまずほっとしています。四月から国際文化学部の学部長に就任する、第一教養部教授で文芸評論家の川村漢氏は言う。

「無用の用」は用なし?

学部が、志願者増の原因だ。どちらも、倍率は三十倍を超えた。「大学としては思い切ったかかげしたが、予想以上に受験生が集まり、ひとまずほっとしています。四月から国際文化学部の学部長に就任する、第一教養部教授で文芸評論家の川村漢氏は言う。

第一教養部からは、作家のリービ英雄氏も新学部に移る。半年間の海外留学

とコンピューターを必修としたのも話題だ。「その二つを学ばせること自体が、新しさではありません。目的意識もなく漫然と学んでいては何も身につかない。自分が何をしたいのか発見させる手段としての留学と「コンピュータなんです」

「文学部は必要」。「たてつけ」と称される閉鎖的な研究体制などへの批判はあまえないが、研究・教育の両面から、文学部の必要性を再確認する内容になった。

「教師も学生も企業の人事担当者も、なぜか文学部

の卒業生は「役に立たない」と思っています。憲法を学んだ学生に対して、西洋史を学んだ学生は、その後、職業教育を受けていくなかで、本当に役に立たないのか。そんなことを言っています。広く人

創立五十周年を迎えた大阪大学文学部は、昨年十一月、「文学部は必要か」と題した記念公開シンポジウムを開いた。刺激的なタイトルにせよ、大学間

係者らが全国から五百人以上集まり、当日は会場に人が入りきらなかった。シンポジウムの結論は「文学部は必要」。

大阪大学で、実際に学生が文学部離れを起しているわけではない、と川北部長が言う。川北部長は



「実学」一辺倒は誤り 人間性養う役割重要



「文学部不要論」という筒井康隆の小説がある。フランス思想に明るい、俗物唯野教授と同僚たちの世にも珍奇な生態を描いて評判となった。「文学部不要論」が出てくる背景には、この小説の描くような、世間とかけ離れた文学部像がある

橋爪 大三郎 東京工業大教授(社会学)

ら、子供をやりたがらない。文学部自体にも批判すべき面があるが、「文学部不要論」まで行くとは見当はずれ。むしろ時代は、人文系の素養を必要としている。近年の教養部改革で、一般教育をなくし、初年度から専門教育を始める大学が増えてきた。私はむしろ、学部レベルでは専門をなくし、全員が人文系の学問を学んでから専門の大学院に進むくらいでいいと思う。現代社会の要請する、専門性と幅広い人間性を兼ねて育てるため、文学部は大きな拠点になるはずだ。大学とは、最高水準の知識に対する尊敬の念を抱く人びとの場所。「役に立つ」ことだけを考えるなら、そういう大学や短大は専門学校に衣替えするほうがいいと思う。

つての「女子大生亡国論」と違って、言い出した人がはっきりしているわけではない。国立大学の独立行政法人化が検討されるなど大学経営の採算性が問題とされるなか、短期的に採算のとれない基礎研究の代表格である文学部の関係者が、「不要論」というものがあるようだが……と、否定的に引き合いに出すことで広がってきた面がある。

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

例えば、県立の広島女子大学が九五年に文学部と家政学部を廃止、新たに国際文化学部、生活科学部を設置した。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「特に分析はしていないが、文部省の方針というより、個々の大学の問題。学生の集まりが悪いから、集まる学科に変更しようというところでしょう」(文部省専門教育課)

「とりあえず文学部に」という腰かけ感覚の学生から教員、研究者準備まで、「(人文学)の」の幅を広く包括するあいまいさを、時代は許してくれない。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

例えば、県立の広島女子大学が九五年に文学部と家政学部を廃止、新たに国際文化学部、生活科学部を設置した。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

例えば、県立の広島女子大学が九五年に文学部と家政学部を廃止、新たに国際文化学部、生活科学部を設置した。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

例えば、県立の広島女子大学が九五年に文学部と家政学部を廃止、新たに国際文化学部、生活科学部を設置した。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

例えば、県立の広島女子大学が九五年に文学部と家政学部を廃止、新たに国際文化学部、生活科学部を設置した。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

例えば、県立の広島女子大学が九五年に文学部と家政学部を廃止、新たに国際文化学部、生活科学部を設置した。九八年には、やはり県立の高知女子大学が文学部を文化学部に変えた。また、新設大学でも文学

「不要論」は多層構造に立っている。文部省によると、国立大学で文学部を廃止したところはない。実際に「文学部は不要」という答えを出しているのは、学生の文学部離れが起きている女子大や短大だ。

戦えない国 ニッポン

不安定要因の多い地域に位置しながら
まともな安全保障論議が交わされない日本
その原因は日本人の「思考停止」にある

そ

のとき、寝起きの日本はことのほか不機嫌だった。四隻の黒船が鎖国日本の「太平の眠り」を覚ましてからほぼ一五〇年たった一九九八年八月三日、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の弾道ミサイル「テポドン」が、日本の眠りをまた妨げたのである（北朝鮮は「人工衛星」と発表）。

このミサイルは、戦後最悪の状況に苦しむ日本に、安全保障という重い課題を突きつけた。だが、その課題を受け止めるには、日本人はいささか現実感覚を欠いていたのかもしれない。「北朝鮮をたたく」——在日朝鮮人の資産を凍結しろ——そんな感情論ばかりが目立ち、理性的な反応は皆無といってもよかった。

実際には日本にとって、国の安全保障をどうするのかは、ずっと

以前からの宿題だった。地勢的にみても、日本が位置する北東アジアは決して安定した地域ではない（関連記事31頁）。

日本のすぐ隣には、世界で最も不安定な体制のもとで大量破壊兵器の開発やミサイル技術の改良に意欲を燃やす北朝鮮が存在する。核兵器とその運搬手段を有し、軍事力の近代化を急ピッチで進める中国という大国もある。

事実、テポドン以前にも危機はあった。九四年に北朝鮮で核開発疑惑が高まったときは、在韓米軍が高度の警戒態勢を敷いた。

日本の元政府関係者は当時の状況について、「日本が国家主権を發動する一つのチャンスだった」と語っている。朝鮮半島で戦争が勃発すれば、あいまいなままだった日本の安全保障問題が、いきなり国民の目の前につきつけられ、自衛隊をどう動かすかの選択を迫られたらどうだろうか。

議論の材料がなかった

これまで日本では、実質的な安全保障論議がなされてきたとは言いがたい。いま国会で進行中のいわゆるガイドライン関連法案の審



軍隊と呼ばない自衛隊の位置づけは相変わらずあいまいなままだ（昨年11月の陸上自衛隊の視察式、右は小沢真吾）

HIERO KATAYAMA / NEWSWEEK JAPAN

議でも、軍事的にみれば矛盾の多いレトリックが横行している。後方支援という軍事行動の一環にはかならない活動を「戦闘行為」とは一線を画するもの」と説明したり、地域という概念をあいまいにするために「周辺事態」という造語を編み出したのはその一例だろう。

「政府は日米安保体制を維持するために、既成事実を積み重ねる手法に頼ってきた」と指摘するのは、東京国際大学の前田哲男教授だ。

「その結果、国民への説明も情報開示も行われず、ここまで来てしまった。安全保障を議論するだけの材料を、日本人は与えられてこなかった」

作れなかった共通の土俵

振り返れば四五年来、安全保障問題が国民的議論になったのは、五一年の対日講和条約の調印や六〇年の日米安保条約の改定ときぐらい。あとは日米安保条約に寄

りかかったまま、自国の安全をどう保障するかという具体的な側面はほとんど論じられてこなかった。東京工業大学の橋爪大三郎教授に言わせれば、日本人は安全保障に関して「思考停止」してしまったのだ。

「人間、頭がついているのだから、状況や他人、自分を見て考えるものだ。ところが、思考停止のための『装置』はたくさんある」と、橋爪は指摘する。「憲法にそう書

いてあるから、というののもその一つだ。憲法に書いてなければ軍隊ももつし、戦争もやるのか。これは実に病的な状態だ」

「日本の発想は二者択一的だ」と言うのは、元内閣安全保障室長の佐々淳行だ。「欧米などよその国では『戦争と平和』なのだが、日本は二〇世紀前半は戦争を選び、戦後の半世紀は平和だけを選んできた。戦争は絶対に触れてはいけないとして、タブー視されてきた」

日本人が安全保障に関して思考停止状況に陥った理由は、おそらく日本自身と、日本を取り巻いてきた状況の両方にある。

「五五年体制という国内のミニ冷戦のために、安全保障を議論する共通の土俵が作れなかった」と、東京国際大学の前田は言う。「護憲派にとっては、議論すること自体が改憲派の手中にはまることになるという意識があった」

一方、東工大の橋爪は、そもそ

テポドンに対する感情的反応を見ると、日本の安全がより直接的に脅かされる事態が生じた場合、反撃を求める世論が条件反射的に

「安全保障論議を拒否するような政治風土が今なお続いていること」に、日本の矛盾がある」と、前田は言う。「冷戦後の安全保障に日本がどのような立場を取るのか」という点について、理論も方針も確立できていない。

その結果、「不測の事態が発生すると、思考停止をしていた分、感情的に反応してしまう」と、橋爪も言う。

建軍の本義を欠く自衛隊

防衛出動の三つ。このなかで、自衛隊が軍隊としての力を発揮できるのは防衛出動だけだが、現行法では実際に部隊が活動するうえで問題点が多すぎるという声は多い。元内閣安全保障室長の佐々は、国会で進行中のガイドライン論議には「国内の有事法制をどうするか」という点が欠けている」と、有事法制の必要を訴える。たとえば現行の規定では、自衛



もう「太平の眠り」を貪ることはできない

THEO YUKI MATSUMOTO / APIS

隊が防衛出動したとしても、任務に必要な土地や施設の是非を判断するのは都道府県知事だ。「安全保障の判断は、知事レベルの問題ではない」と、佐々は言う。一方、東京国際大学の前田は、「有事法制では、テポドンのように飛来するミサイルにまで対応することはできない」と、その有効性に疑問をもつ。太平洋軍備撤廃運動国際コーディネーターの梅林

隊が防衛出動したとしても、任務に必要な土地や施設の是非を判断するのは都道府県知事だ。「安全保障の判断は、知事レベルの問題ではない」と、佐々は言う。一方、東京国際大学の前田は、「有事法制では、テポドンのように飛来するミサイルにまで対応することはできない」と、その有効性に疑問をもつ。太平洋軍備撤廃運動国際コーディネーターの梅林

出発点に戻って議論を

建設的な安全保障論議をするためには頭を使うしかない、前田は言う。「日本はまだ冷戦後の「次のスキーム」を見つけていない。今こそ、イデオロギー主導型の議論ではない安全保障論議を重ねるときだ」

東工大の橋爪は「護憲が改憲かで安全保障を語るような議論はお払い箱にして、議論の出発点に戻らなければならない」と言う。

「出発点とは、なぜ日本があるかということ。財産権や身体・生命の安全をわれわれはこの場所を期待し、自分の生活を構成して、その中のネットワークや社会、社会を秩序づけるものを自分の利益として確保する。そういう利益をどうやって保障するかを自分の頭で考えるほかはない、橋爪は言う。もちろん、軍事力だけで平和を守れるわけではない。「北朝鮮に

「自衛」のねじれた歩み

平和憲法とアメリカの世界戦略のはざまに、日本の安全保障政策は複雑な歩みを辿ってきた。

- 1946年 日本国憲法公布
1950年 ダグラス・マッカーサー連合国最高司令官の



自衛隊創立時の観閲式(1954年)

指令によって、警察予備隊が創設されることになった。1951年 対日講和条約・日米安全保障条約調印。日本は独立を回復すると同時に、引き続き米軍を駐留させることに。1954年 日本の兵力増強をアメリカが援助することを趣旨とした、日米相互防衛



自衛隊の現状と現行法の矛盾は、カンボジアPKOをめぐる議論でも浮き彫りにされた

PANA

戦前も戦後も根は同じ

四五年まで存続した天皇直属の旧日本軍は、統帥権の名のもとに内閣や政府とは別系統の存在として位置づけられた。シビリアンコントロールのシステムや、人民解放軍のように党が軍隊を統括する仕組みをもたなかった。

これが「国家の中の国家」のような二重権力状態を生み、そのため旧日本軍は「戦略も略もなく、戦術的にも非常に合理性を欠く行動を取る軍隊になった」と、橋爪は言う。そして、コントロールなき軍隊は「暴走」した。

第二次大戦での敗戦後、アメリカによる戦後処理のなかで旧日本軍は消滅し、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と定めた日本国憲法が制定された。だがその直後、同じアメリカの要請によって、警察予備隊——後の自衛隊が生まれた。

外国からみれば、自衛隊は世界第三位の予算規模を誇るれっきとした軍事組織。だが憲法解釈上、軍隊と呼ぶわけにはいかない。この位置づけのあいまいさが、戦う組織としての合理性を自衛隊がもてない状況を抱いている。たとえば、「軍隊というものは実際の戦闘行為に入る前に準備し、展開しておく必要がある」と、自衛隊のある元幹部は言う。だが現行の自衛隊法のもとでは、首相が国会の承認を必要とする防衛出動命令を出すまでは、部隊は駐屯地の外にすら出られない。

「出動命令が出てからではとても間に合わないの、演習の名目でもって部隊を演習地に移動させるということ想定していた」と、この幹部は言う。現実に見合った法律がないため、「超法規的措置」を取らざるを得ないというわけだ。自衛隊の現状と法律の矛盾は、カンボジアでの国連平和維持活動(PKO)への参加をめぐる論戦でも浮き彫りになった。「戦前は軍隊でありすぎて、国民がコントロールできなかった。戦後は実態としての軍隊があるのに、それを認めないためにコントロールできない」と、橋爪は分析する。「現象は違うが、根は同じだ」

感情的反応に走るおそれ

冷戦下では、ある意味でそうした状況が許されていた。核兵器に



60年安保闘争のデモ隊

想定して広範な有事対応プランを検討した。防衛庁の内部文書「三矢研究」の存在が明らかになり、国会が紛糾。1978年 「日米防衛協力のための指針」が閣議で了承された。栗栖弘臣・統合幕僚会議議長が、週刊誌のインタビューで有事の際の法

制度の不備を指摘。万の際には部隊幹部の判断で「超法規的行動」を取らざるをえないと語ったことが国会で問題となり、事実上更迭される。1991年 旧ソ連解体、冷戦終結が決定的に。湾岸戦争終結後、日本は掃海艦など6隻の海上自衛隊艦艇



ベルシャ湾をゆく掃海母艦をベルシャ湾に派遣。1992年 カンボジアPKOに自衛官が参加

「私たちが盗聴法には大反対だっ」

橋爪大三郎(東工大教授)
「盗聴は正しい、それ以外は考えられない。あるいは盗聴は違法だ、それ以外は考えられない」という議論だけではこの問題は決着がつかない。犯罪防止という公共の利益と個人のプライバシーとのバランスの問題なのです。ただ、こんなには警察が信用されていない状況では、盗聴に厳格なチェックが要るのに、この法案にはその準備が足りない。違法な盗聴への処罰も困難だし、盗聴をセンサーする機関や法定代理人の発想もない。法律として美しくありません」

日本の将来は？ 本定期世調査

1999年(平成11年)1月1日 金曜日

もたれ合いへの「ノー」



橋爪大三郎さん 東工大教授
大蔵省と銀行に代表される、日本の政治・経済システムの根底にある「もたれ合い」の構造に、国際社会が五ロカードを突きつけている。両者のもたれ合いは今に始まったことではないが、これまでたまたま経済が好調で、問題が表面化しなかっただけだ。
案の定、バブルの後始末もできない実力のない銀行が次々と落ちこぼれ、大蔵省も支えきれない。
もたれ合いはもうダメだと国民が気づき、官僚と銀行への不信が高まったのは当然で、これまで信用されてきたのが裏切られた。それにしても政治家の信用が低すぎる。不信の根がどこにあるのか、政治家は有権者の声をくみ取るべきだ。同時に有権者も政治家の役割をもっと重視していく必要がある。

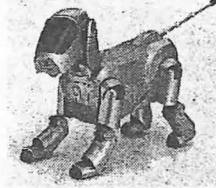
東京工業大学教授・橋爪大三郎さん(社会学)の話

石原さんが議院部知事と争ったところの保守、革新という対立軸は、すでにない。既成政党も嫌だが、青島知事にも懲りたという無党派層が、多分は政治経歴のある人物を選んだということだと思う。石原さんの当選は、青島

膨らまなかった期待

知事誕生の時のような書扇現象とはいえない気がする。どの候補者に対して有権者の期待感はいくらも、都民も投票に迷ったと思う。そんな中、各派といわれた石原さんが「実行力ある政治家」というイメージを浸透させたこと、さも他の候補者を振り切る形になった。

い、二十万人都民がひとりのリーダーを選ぶ充実感のある選挙だ。今回は無党派層の候補者が乱立し、都民も投票に迷ったと思う。そんな中、各派といわれた石原さんが「実行力ある政治家」というイメージを浸透させたこと、さも他の候補者を振り切る形になった。



25万円と高価ながら人気の「AIBO」

しゃべりぬいぐるみを求めて長蛇の列が伸び、インターネットで予約を受け付けた犬型ロボットは瞬く間に完売。最近相次いでお目見えした「電子ペット」の人気の沸騰ぶりが話題になっている。双方とも購入者の大半は二十代と三十代の人たち。マンションやアパートを飼えない住宅事情を反映し、文字通りのペットの代わりに「生き物」を通じて手間が掛からなくて済むという理由で購入する人が少なくないという。背景には「人間関係に傷付きやすい人の増加があるのでは」と指摘する声もある。

話すぬいぐるみ・犬型ロボット

トミーが五月末に発売した言語学習機能付きのしゃべりぬいぐるみ「ファービー」と、ソニーが一日に予約を受け付けた家庭用の犬型ロボット「AIBO」(アイボ)は、ともに言葉を掛けたら、なでたりすると反応するのが特徴。購入層はファービーは「大半が二十代と三十代で、男性よりも女性の方がやや多い(トミー)」。AIBOは「三十一代と四十代を中心に九割は男性(ソニー)」という。

手間かからず傷つけず

希薄な対人関係映す？

AIBOは価格が二十五万円と高額なことが購入層の偏りにつながっている面もあるが、大人たちの「電子ペット」ブームの背景には、それ以外の要因もあるようだ。ファービーを買った大阪市内の売店店員の男性(仮名)は「友達がどのコミュニケーションのきつかけになる」と気に入った様子。勤めていた店先に置いておくと現代人の傾向を分析。その



開店から2時間足らずで売り切れたファービー(5月29日、大阪・梅田)

ら、共通の話題になって客と話をする機会も増加。一昨年の大ブームになった「まじっちゃん」に比較し、「一人の画面に向かって楽しむ電子ペット」よりも魅力がある」と話す。
東京都港区の在宅ワーカ―の女性(33)は、ペット感覚でファービーを三個購入。ネコも飼っているが、「ファービーは、こちらがかまってあげたい時だけかまえる点がいい。暴れたり死ぬこともない」と言う。
「部屋でファービーに話しかけたり、あやして楽しんでる」神奈川県座間市の女性(20)も「マンション住まいでペットを飼えないが、十分ペット代わりになる」と話している。
ノンフィクション作家の久田恵さん「人間関係に傷つきやすく疲れる人が増えていく一方で、なれなれもかわりを持たないことでは耐えられない人も多い」と話す。
また、東工大の橋爪大三郎教授(社会学)は「人間からの社会ではあり得ないが相手をするという個性が、人間関係の希薄さを映している」と指摘する。